

権限は市民のそばに

●大和ことばのノーマリゼーション

お棺の中で、大柄な本田義信さんが窮屈そうに眠っていました。

二カ月前に会ったとき、「あと五年ていいから生かしてほしい。実現したいアイデアがまだいくつもあるんですよ」と絞り出すような声で語った本田さんの言葉が、私の耳に焼きついていました。志なかばて世を去るのは、どんなに悔しかつたことでしょう。泣きむしの私は涙をとめることができません。

一九八七年七月十四日の朝、大学病院の霊安室で、本田さんとの不本意な再会でした。

*

本田さんが牽引車となって進めてきた福岡県春日市社会福祉協議会の仕事に、私は『大和ことばのノーマリゼーション』と愛称をつけていました。「ノーマリゼーション」という言葉が日本で有名になるずっと以前から、日本人の心に根ざしたノーマリゼーションを実行に移していたからです。

しかも、それは、福祉先進国に少しもヒゲをとらないものばかりでした。

たとえば、ここの配食サービスは、私が見聞した限りでは「世界一」です。

一九七五年に開始されて以来、昼夜二回、一日とて休むことなく配達し続けられています。配達のために訪問することが、利用者の孤独をいやし、安否を確かめる役割もはたしています。

北欧の配食サービスは「三六五日休みなし」ですが、「昼一回」がふつうです。回数では春日のほうが上です。

献立の多彩さ、親切さでも、春日に軍配があがります。同じ献立が一カ月に二度出ることはありません。しかも、お年寄りの口に合う郷土料理がふんだんにとり入れられています。月二万円と格安なのに、季節感が盛り込まれ、たとえば、大晦日は三段重ねのおせち、お彼岸にはおはぎ、土用はうなぎ、九月は栗ご飯、十月は松茸ご飯……。

意見や苦情の拝聴会を兼ねて、月に一度は会食の機会がもうけられています。桜の花見、花菖蒲の鑑賞、紅葉狩り、菊見などのイベント付きの会食です。このときには、ふだん配食するのがむずかしい、寄せ鍋、すき焼き、焼き肉、水炊きなどが用意されます。

半身不随や病弱で、他の土地に住んでいたら施設や病院に入るしかないお年寄りが、この春日では、住み慣れたわが家で、馴染みの近所に囲まれて、「ふつう」に暮らし続けています。配食サービスのおかげです。

体が不自由な人、両親が留守がちの家庭の子どもたちも、この配食サービスの恩恵を受けています。

ホームヘルパーと配食サービスのおかげで、この90歳の男性は自宅で独り暮らしを楽しんでいます

この日の献立は、焼き魚、酢の物、煮物、そしてお汁粉

バンク・ヒルセルセンさんのいうノーマリゼーションの「一日のリズム」が、昼と夜の配食サービスによってつくり、「二年のリズム」が、四季折々の食事と行事を通してつくりだされているのでした。

もうひとつ驚いたことがあります。配食を担当する社協の職員が「このお年寄りには食事を作る力があるのではないか」と判断すると、「もっと安い『おかずの材料配達』に切り替えてみませんか」と勧めるのです。先方が関心を持ったら、栄養がかたよらないように配慮した献立の材料に、料理の仕方のメモを添えて配達します。

これは、デンマークの「高齢者医療福祉政策三原則」で強調されている「残存能力の活用」そのものです。

*

隣町には、社協が借りた「老人農場」があり、ここでお年寄りたちが野菜を育てています。収穫すると配食サービスの材料になります。それが、お年寄りの生きがいにも自慢にもなっています。「残存能力の積極的な活用」です。食事は農場に通う当のお年寄りにも届けられます。

自宅での暮らしは不安だという人のために、八四年から、「老人下宿・幸せの里」が始まりました。十九所帯分の部屋のそれぞれに非常用のマイクが付いていて、呼ばれると宿直の職員が夜中でも駆けつけます。

月三万九千五百円で三食、お世話付き。学生の下宿とそっくりだということで「老人下宿」と命名されました。これなら、明治生まれにもイメージが湧きます。「ケア付きハウス」とか「シエルタートハウジング」などという、お年寄りにチンプンカンプンの片仮名の命名をしないのが、春日らしいところです。

しかも、プライバシーは十分に配慮されています。

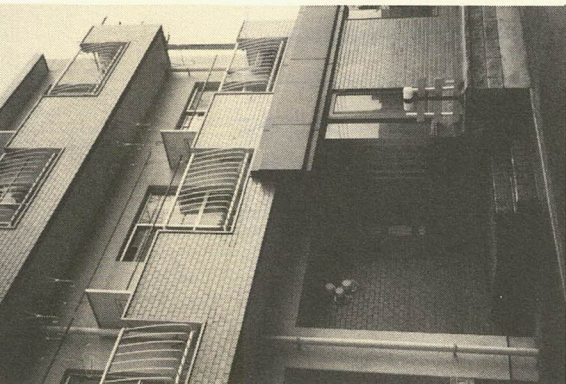
門限だの起床時間といった規則は一切ありません。

「老人別荘」というものもあります。これは、嫁姑紛争を解決しようと知恵を絞った末に生まれたアイデア

老人下宿は思い出の暖かいほだです



老人下宿の一層には、冷やかしと、配食サービスの車が



でした。時折、旅の気分を味わえば、同居家族との仲のきくしやくも薄らぐだろうという深謀遠慮でつくられたのです。

湯布高原の「老人別荘・幸せの村」は茅葺きの茶室付き、阿蘇高原の「老人別荘・幸せの森」はペンション風で、夕食にはフランス料理が出ます。福祉の仕事だからといって貧乏たらしくもないのも春日流です。ただし、値段は三泊四日で一万円と、いたって庶民的です。しかも、車いすで別荘のどこにでも出入りできるように配慮されています。

●「お得意様に密着せよ」

話は飛んで、一九九〇年の初夏、デンマークの福祉を見聞して帰った経済評論家の滝上宗次郎氏が、興奮気味にこう話してくれました。

「デンマークの公務員は、日本のお役人とまるで違いますね。現場を大事にし、組織の簡素化もいとわない。アメリカのビジネスマンの間でベストセラーになった『エクセレント・カンパニー』に出てくる『超優良企業の条件』、彼らはそれと実に良く似た内容のことを話すのです。まったく驚きましたよ」

滝上さんは有料老人ホームの若手社長でもあり、「デンマークに寝たきり老人がいらないなんて信じられない」「公務員のホームヘルパーが高齢者のために親身に働くはずがない」「何かからくりがあるはずだ」と、デンマーク

に出かけていったのです。

実は、私自身、テンマークやスウエーデンを訪ねるたびに、公務員の公務員らしくない仕事ぶりに当惑していました。どこが、どう違うのか、なぜ違うのか、突き止めたいと思つていたところでした。

私も遅ればせながら、『エクセレント・カンパニー』を読んでみました。そこには、こんなことが書いてありました。

① 超優良企業は、顧客の声に熱心に耳を傾けることによつて、最良のアイデアを得ている。

お得意さまに密着せよ！

② 超優良企業は、巨大さに伴いがちな鈍さに、けんめいに対抗しようとしている。

やってみよ！ だめなら直せ！ 試してみよ！

③ 超優良企業は、ごく末端にいる一般社員を品質・生産性向上の源泉のように扱っている。

④ 超優良企業は、管理階層が薄く、組織はまことにすっきりと単純である。

単純な組織と小さな本社を！ 小さいことはいいことだ！

なるほど。ここ、テンマークの省庁や市町村に関してなら、ここに出てくる「超優良企業」という言葉を「役所」という言葉に置き換えても、少しも不自然ではありません。「お得意さま」を「高齢者、障害をもつ人、市民」に、「一般社員」を「ホームヘルパーや公務員」に置き換えても通じます。

北欧では「権限は、市民のそばに」という言葉をしばしば聞きました。

どうやら、このあたりに、謎を解く鍵がありそうです。

● 権限は、市民から遠く離れて……

この置き換え作業をしていて、もうひとつ気がついたことがあります。

春日市社協も、この超優良企業の条件がぴったり当てはまるのです。ここの活動は六〇年の「心配ごと相談」から始まりました。それ以来、すべてのアイデアは「お得意さま」にあたる市民の声に熱心に耳を傾けることから出発しています。配食サービスも老人下宿も老人別荘も、そうして生まれました。寝たきり状態の人には入浴やアトーン乾燥の出前サービスもあります。送迎や配食のため、十三台の車が人口八万足らずの市内を一年中走り回っています。

この春日市社協の前に、いつも立ちふさがるのが、法律と行政でした。送迎サービスは福祉のカナメなのに、「道路交通運送法」ではそれを禁じています。それは、会員制にするという方法を思いついて、やごと切り抜けました。老人下宿も、県と国の了解をとりつけるのが大仕事でした。何年もお百度を踏み、そのあけく「軽費・簡易・小規模老人ホーム」という奇妙な名前をもらつて、やごと補助を受けられたのでした。

日本は「権限は、市民から遠く離れて」の国なのです。

悪戦苦闘し、無理がたたつて、本田さんは配食サービスが始まった年に腎不全に陥りました。一日おきに人工透析を受けて命をつなく日々でした。その体で本田さんは陣頭指揮に立ちました。老人別荘づくりでは寒風にさらされ、スコップを握りました。少しでも経費を減らすためでした。

八七年はじめ、心不全を併発。

六二歳の早すぎる死でした。